OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小杉天外『はやり唄』論
Author(s)	村岡, 聖
Citation	阪大近代文学研究. 2014, 12, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68328
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小杉天外『はやり唄』論

村岡 聖

はじめに

小杉天外作『はやり唄』（明治三五年一月、春陽堂より刊行）は、遺伝と環境作用の客観的描写により人間存在の科学的描出を企図するゾライズムの受容によって成立した前期自然主義の作品として、文学史上にかつて位置付けられた作品である。しかし、内容的には写実的客観描写が過ぎて場面描写が冗長に陥り、心理変化が不明瞭で姦通の発生が突発的に感じられること(1)、遺伝作用を描こうとするもその他の要素が混在し、それが遺伝と相反していること(2)、文学史的にはゾライズムの受容がその手法の模倣にとどまり浅薄であること(3)などが問題点として挙げられた。そのため、本作は、皮相的にもゾライズムを輸入したという文学史上の意義を認められながらも、その後改めて顧みられることは少なく、作品読解がほとんどなされてこなかった。よって、本作の解釈は十分に議論されてきたとは言い難い。

文学史上のゾライズムの輸入という観点から考えれば、従来の評価が必ずしも間違いであるとは言い切れない。しかし、ゾライズムや作家の技量、あるいは描写法のみに焦点を当て作品を眺める視点では、本作が持つ文芸性とその独立性を見失いかねず、本作を単なる文学史上の歴史的遺物としてのみ捉えることとなってしまうだろう。同時代の段階において、天渓が雪江の姦通に遺伝よりも「寧ろ自由意志の結果」(4)を見、また、孤島が「遺伝といふ噂の必理上の影響」(5)を見出そうとしていることなどは注目に値する。彼らがこのような解釈を提示したことは、ゾライズムにのみ還元されない読みが可能であることを期待させる。その意味で、本作に「日本文学の伝統」につながる「物語文学」の要素を見出した安田義明(6)氏の論は本作の新たな一面を示したと言えよう。つまり、一旦、ゾライズムの視点から距離を置いてみれば、本作は従来の作品理解とは違った解釈が可能なのではないかと考えるのである。と同時に、遺伝作用の描写が不徹底

であるということを作者の技量の問題として批判するのはよいとしても、読解の面では、むしろ読みの材料として捉えてみるべきではないだろうか。また、本作は心理描写が少ないが、登場人物たちのそれを理解する手掛かりが皆無というわけではない。本論ではあえてゾライズムや作者を視野に入れた枠組みを取り外すことで、本作を精読し、そこに何が描きこまれ、それがどのように読み取れるのか、改めて作品読解の問題とその可能性に迫ってみたい。

一　雪江の夫への思い

まずは、円城寺雪江の人物像について、改めて確認しておく必要があるだろう。次に引用する部分を見よう。（なお、引用文中における注は筆者による。以下同じ）

「貴方（注・秀吉のこと）の叔母様（注・薫のこと）は、本当に人の悪い叔母様ですねえ。」

「併、其が一番に可え、夫婦間可えなア家内安全の基らア、はゝゝゝゝ。」

「阿爺様（注・庄左衛門のこと）まで彼様な……。」雪江は無理に顔を顰める。

「全くですねえ阿爺様、夫婦間が好くツて他に調戯はれる程結構な事はありませんやねえ。」と主婦（注・雪江の叔母のこと）が云ふ。（二）

引用した場面は、雪江の親族である大円城寺家の薫や、薫の父、雪江の叔母らが、雪江夫婦の円満さについてからかい気味に言及する場面である。ここから、雪江夫婦の仲睦まじさが「夫婦間が好くツて他に調戯はれる程」であったことが確認できる。また、別の箇所にも、二人は「内外の者に余り睦し過ぎるとまで笑はれた間」（七）とある。この睦まじさが他人からそう見えたに過ぎないというだけではないことが次の常雄に接する雪江の姿から確認できる。

今珈琲を煮に行つた間に、雪江は衣服を着更へて来てゐる。素肌に瀧縞のネルの単物、帯は黒繻子と友仙の腹合せを引掛けに結んで、従来見たことの無き意気な風をして、良人に視詰められるを羞し想に微し面を赤め、

「此様な風して、可笑いでせう？」と莞爾笑ふ。

「いや、可笑い事は無い。」常雄も何とは無しに莞爾する。

「ミルクが多過ぎましたか？」と一口飲んで見て、また莞爾する。

「いや、丁度好い。」（七）

にっこりと微笑みながら、まめまめしく夫に接する一途な彼女の姿がここで読み取れる。

そのような雪江であったので、彼女は「淫乱な血統」（一）を持つ円城寺家に生まれながらも、それを断ち切り、「婦人の鑑」（一）になるとまで村人から期待されている。それは、彼女が夫常雄に一途に接するが故であった。

しかし、常雄が妾を囲っていることを知ったとき、雪江は異常な行動を取り、また、常雄に対して意地の悪い態度を取る。妾の話を墓参の帰りに聞いた雪江は、帰宅後一度はさほど心配する必要はないと考えたが、その後、就寝前に至って、妾を描いたと目される絵画を発作的にナイフで斬裂くのである。また、常雄に対しては、家を飛び出し寄寓した大円城寺家で、彼が恥をかくと想像されるにもかかわらず、妾を家に入れるように親族の者から持ち掛けさせるという依怙地な態度を取る。

だが、それらの行動や態度は一時のものであり、雪江が常雄をやはり憎み切れないこともまた間違いない。例えば、彼との諍いから大円城寺に寄寓しながらも、一旦、夜に自身の家に忍び帰った雪江は、妹の竹代からその依怙地な我儘を責められ、「自ら後悔の涙を禁め得なかツた」（九）のである。また、常雄が雪江との離縁を切り出したとき、雪江は「従順い心を起し」（十一）て、「恕して戴き度き事を涙と共に願つた」（十一）のであった。そして家に帰り、常雄のよそよそしい態度に胸を痛まされながらも、彼女は慎み深く「良人大事に勤めて」（十一）、その機嫌回復に心を砕く。すげなく不機嫌な夫に彼女がひたすら従順に奉仕し、「何処までも旧の様な間に復す」（十一）ことを志向するのは、自戒の念と共に、夫への思いがその原動力の一端となっていたためと考えられる。見てきたように、雪江は夫に一途な女であった。

二　竹代の譫言

さて、夫に対して一途な雪江を確認したわけだが、しかし、熱に浮かされた竹代が発した譫言を鑑みると、雪江は有夫の身でありながら、石丸達にも特別な感情を抱いていた疑惑が浮上する。その譫言とは、次のようなものであった。

「最う、石丸様が馬へ乗つて此村へ来らした時、彼の時から惚れてるんですよ、本当、姉様が然う云ひましたもの、美男子だツて、私も然う思つてよ……、だツて、些とも恥る事は無いわ、奇麗な物は誰にも奇麗に見えるんだから……。」（十二）

確かに、姦通を犯す日に、雪江が「今日の医学士は如何にも奇麗で、又如何にも立派」（十三）と感じ、彼を「瞬もせずに眺め」（十三）ることから、このときの彼女には石丸への特別な好意があったことが読み取れる。

しかし、雪江は姦通を犯す日以前から、即ち石丸が村へ来たそのときから、本当に彼に好意を持っていたのだろうか。そもそも、竹代の譫言は正鵠を得ているのだろうか。それを検証するために次の場面を見たい。それは、石丸が初登場する場面で、彼が円城寺家を訪ねようと墓参から帰る雪江一行の付き人に道を尋ね、その会話を聞いていた竹代たちが石丸について話し合う場面である。

「叔母様（注・薫のこと）、叔父様（注・礼之助のこと）

へ来た客だよ。」と少年（注・秀吉のこと）は薫の傍へ嬉想に駈けて行った。

「何処から来た人だらう、東京か知ら?」と薫は呟いた。三人の女は先刻から儀助と客との話を残らず聞いて居たのである。

「必然東京だよ、大学の工学士だよ、賭しても可いや。叔母様、疾く帰らうよ。」と薫の袂を曳いて云った。

「私、何処かで見た事が有る様だが、」と竹代は首を傾げて、「礼様の下宿だツたか知ら?」

「何うも、此県の人の様ぢや無いねえ、」と薫は、桑畑に隠れて半身より見えぬ今の男を眺めながら、「だけれど、東京の人なら、宇都宮の方から来さうなもんだが、訝しいねえ。」

「必然東京だよ、可いなア、馬に乗つて漫遊するんだ、可いなア、」と云つて、また薫の袂を曳いて、「叔母様、疾く家へ行かうよ。」

此様な事を云つてる中に、一行は庚申塚の前まで来た。

（三）

この場面を見る限り、石丸について話し合っているのは竹代、薫、秀吉たちであり、雪江は石丸と下男の話を聞いてこそいるが、少なくとも「石丸様が馬へ乗つて此村へ来らした時」には何の発言もしていない。

さらに注目すべきは、この石丸についての竹代たちの会話の直後に「「竹代様、お前様の其れを知つたのは、如何云ふ処から知つたの?」と今まで何事か考へて居た雪江が云つた」（三）とあることである。この時の帰り道で、雪江が夫の妾に関する噂を初めて聞いたことを鑑みれば、彼女の考え事とは夫のことについてであったと考えてよいだろう。夫に一途な雪江であったのであれば、その考え事は決して小さくない心配事であったはずである。石丸の登場する前から彼女が夫のことに気を取られていたことが、「此様なに気を揉ませないで、直ぐ話して呉れても可いでせう」（三）と、噂を知る竹代たちにしつこく事の真相を聞きただそうとする姿勢からも窺える。であるならば、「今日墓参の帰途に聞いた時は、其の芸妓は如何なる芸妓で、其の新聞には如何なる事が記いてあるかと、想像は面白からぬ方にのみ馳つた」（四）とあるように、夫のことに気を取られていた状態において、彼女がどこまで石丸に注目していたかは疑問の余地があるのではないだろうか。

さらに次の箇所を見よう。絵を斬裂き、その後倒れた雪江のために石丸が再診に来たことを、竹代が雪江に告げる場面である。

「姉様、お医師様が来ましたツて。」（中略）

「何様な人だい? 昨夜の事は全然夢の様なの、些とも判りやしないんだもの。」

「だツて、昨日、お寺から帰途に見ましたらう、ほら?」

「いゝえ、能く覚えてないよ。筆、何様な男？」
「はア、真に……、あの奇麗なお方でございますよ。」
と微し赤くなツて云ふ。(六)
一読して明らかなように、雪江は石丸を褒めることはおろか、そもそもはっきりと見ておらず、記憶すらしていないのである。彼を誉めているのは女中の筆であった。このように見てくれば、雪江が「石丸様が馬へ乗つて此村へ来らした時、彼の時から惚れてるんですよ」という竹代の譫言が、雪江の石丸への思いを証明する客観的根拠にどれ程なり得るのか疑わしくなってくるのではないだろうか。
また、そもそも、雪江は竹代の譫言を聞いた直後に、竹代に次のように述べていた。
「だけれど、其れも此れも、私を案じるからなんだねえ、」
と雪江は溜息を吐いて「竹代様、お前様ねえ、種々と私の心を邪推……、彼の、私の心を種々と心配してお居での様だけれど、私はね竹代様、決して、お前様の心配する様な事はしないからね、何卒、其様なに案じてお呉れでないよ、ね。私だツて、少しは書も読んだし、良心と云ふ物も有るぢやないかね、豈夫其様な、人に笑はれる様な事は為なからうぢやないか……。」(十二)
ここで、雪江は竹代の譫言の原因を考え、それが「邪推」であると述べている。即ち、雪江は竹代の考えを否定しているのであった。「邪推」という発言の後に「……」とあり、雪江は言葉を換えてはいるが、その後の文脈が結局竹代の「心配」を否定していることに変わりはない。
さらに以下に挙げる場面に注目したい。その場面とは、雪江が家出先の大円城寺から一旦自身の家に帰るも、そこで自身を避ける夫の態度に痛手を受け、夜中に再び大円城寺家に戻るが、その途中で石丸に出会い、石丸が翌日東京に帰ることを彼自身から知らされる場面である。
「縁と云ふものは可笑なもんで、明日立つと云ふ今夜、偶然爰で、また御一緒になりました、はゝゝゝゝ、不思議と云へば不思議にもなりますな。」
雪江は一寸歩を止めて、
「あの、明日お帰なのですか？」
「は、然うです。大変長く遊びましたから。」
「左様でございますか。」と雪江は、まア何と云ふ急な事てせうと云ふ様な語調である。併し、達が急に出立する事は、今日庄左衛門の庭で、薫や礼之助と共に雪江も聞いたのであるが、其時は執事の駒尾と言争つた後で、胸は外の思に乱れて居たので、能く耳に入らなかツたらしい。(十)
ここで、石丸が東京に翌日帰るという性急さに少なからず驚いている雪江が確認できるわけだが、見逃してはならないのは、石丸の帰京の知らせが、実は雪江にとって二度目に聞く情報であり、彼女は一度目のそれを全く記憶できていなかっ

たということである。ここでいう執事の駒雄との言い争いとは、妾を家に入れるか入れないかの常雄の考えを駒雄が伝達しにきたと勘違いした雪江が、それとは全く関係のない財産の話をされて、不愉快な思いになるという出来事を指す。つまり、雪江は夫に関することで「胸は外の思に乱れて居た」と言える。だからこそ石丸の帰京のことが「能く耳に入らなかツた」、即ち記憶に残らなかったと言えるだろう。語りは「能く耳に入らなかツたらしい」という言い回しであるが、事実雪江が石丸の帰京を覚えていなかったのは間違いない。ここから読み取るべきは次の二つである。一つは、他のことが頭に入らない程夫常雄は雪江にとって良くも悪くも大きな存在であるということ、そしてもう一つは、それに対して、石丸は所詮雪江の記憶に入り込む程の人物ではなかったということである。であるならば、雪江が石丸に好意を抱いていたと見るのは無理があると言わざるを得ない。

三　譫言の原因

竹代の譫言が疑わしいことから、雪江は少なくとも姦通を犯すその前までは石丸に懸想しているわけではなかったのではないかということを考察してきたが、ここで問題なのは、ではなぜ竹代はそのような譫言を発してしまったのかということである。

そもそも、竹代は聖書を読み、質素な生活を心がけ、日々勉学に励む謹厳な人物であり、彼女は姉夫婦の関係がこじれないように注意を払うのだが、なぜか、姉と石丸との関係についてもやたらと危惧する。彼女は、石丸が雪江の再診に来たときに、彼らを二人きりにしないように注意し、たまたま二人きりになってしまうと、顔を「真蒼」（六）にし、「尋常事ならぬ様子」（六）になる。また、自身がインフルエンザに倒れたときも、石丸に診察しに来てもらうことを必死に拒もうとする。ただ単に雪江夫婦の衝突を回避したいだけであれば、夫婦二人の関係の推移に関して気を揉むことは自然であるが、その争いに関係のない第三者の石丸と雪江の関係にまで顔を「真蒼」にしてまで神経を尖らせる必要はないはずである。まるで彼女ははじめから雪江が石丸に特別な感情を抱くと決めてかかっているかのようですらある。なぜ彼女はそこまで危惧するのであろうか。

これらの問いの解答としては、先行論でも指摘されているように(7)、竹代が雪江を「淫乱な血統」が遺伝した人物として認識していたからということが考えられるだろう。そもそも、竹代のみならず、円城寺一族の多数が、自分たちの血に「淫乱な血統」が流れていることを多かれ少なかれ意識している。大円城寺家に住む秀吉少年が、些細なことから薫と口論になり、彼女を責めるときに「淫乱な血統」について発言した後、円城寺家の人々は顔色を変えるわけだが、そこに「淫乱な血統」が自身の血にも流れていることへの意識を持

つ彼らの存在が窺える。雪江は「何様な事を聴いた処で、正可私まで、世間の胡盧に成る事は為なからうぢやないか」（三）という発言をしているが、竹代には自身も含め、円城寺家全体に対して、「淫乱な血統」の存在を強く意識していたと考えられるだろう。この意識が、雪江に対する認識にも反映され、先に見たような譫言を発し、二人の関係を危惧することを促したと考えられる。

さらに、家出騒動の後、機嫌を損ねた夫に対して健気で献身的な態度を示す雪江を誰よりも近くで見ていたのは、竹代であったことに注目しておきたい。だからこそ、竹代は、なかなか夫と元のような関係になれない姉の落胆ぶりを見て、次のように振舞う。

それを始終目の前に見て居る竹代の身になると、辛さは百倍で、昨日まで姉の我儘を気にしたものが、今は蔭になり日向になりして慰める事に懸つて居る。（十一）

つまり、竹代には、十二分に夫一途の姉の姿が見えているはずであった。であるから、竹代こそ雪江の「淫乱な血統」を最も否定することができた人物のはずであった。にもかかわらず、あのような譫言を発してしまったところに、その原因としての雪江イコール「淫乱な血統」を持つ者という竹代の認識の強大さが浮かび上がるのである。

ただ、ここで竹代が石丸に懸想していた可能性を考慮しておかねばならないであろう。謹厳な生活を心がける竹代であるが、石丸に会うときに限って彼女が服装を着がえたこと、石丸の手に触れたときにその白さが彼女の眼にとまったことなどを衡量すると、竹代が石丸に特別な思いを抱いていた可能性が想定できる。であるならば、その自身の恋慕の錯綜から、姉も石丸に恋しているのではないかとの不安が竹代の潜在意識に芽生え、よって、あのような譫言を発してしまったと考えることも可能であるかもしれない(8)。しかし、それはあくまで可能性に過ぎず、それを証明する決定的な根拠がないこともまた間違いない。また、想像を逞しくして、仮に上記のような恋の思いにより譫言を発したとしても、竹代が姉に偏見を持っていたこと自体に変わりはない。なぜなら、竹代の場合、先にも述べたように、雪江が夫一筋であることが誰よりも見えていたのであって、たとえ竹代が石丸に特別な感情を抱いていても、姉の姿勢を見て安心こそすれ、姉もまた然りであるとの不安意識を持つには至らないはずだからである。にもかかわらず、譫言を発するまでに姉も石丸に惚れているのだと考えてしまうのは、雪江に「淫乱な血統」が流れており、夫がいても姉は他の男性に懸想するかもしれないとの考えを、竹代が持っていたからと考えるに他はないだろう。

四　薫の懸念

竹代と同様のことが、薫に関しても言える。薫も雪江と石

丸の関係を疑っていた一人である。先ほどの夜道の会話があった翌日に二人の様子が平生と違うことを大円城寺家の薫が感じ取る。薫は昨夜雪江のお供をしていた下男に、二人に何があったかを尋ねるも有力な情報は得られず、次のように心配をする。

薫は、此の神経の鈍い下男の気に着かぬ事が、昨夜の帰途に有つたものに思うて、其れと無く二人の挙動を注意して居た。何うも然う思うて見る故か、雪江と達との間が是迄の様で無い。是迄は、人の見ぬ処でも二人は平気で対合つて居たものである。処ろが今日は、達に顔を見らるゝも体裁悪気に、懸つて傍へ寄られぬ様に逃廻つて居る、と、達の方では切に気を焦つて近寄らうとして、雪江に逃げられる毎に失望の色が顔に浮ぶ。

薫は独で気を揉んで、何卒して間違が無くて呉れゝば宜い、何卒して二人を早く分けて了ひ度い、自分許でやきもき心配しても詮方が無いから、竹代に打明けて相談しやうか、それとも礼之助に頼んで、達を速く立たせる様に仕たものか、如何したものと胸を痛めてゐる間に、(下略)(十一)

薫が感じたように、頻りになんとか雪江に近寄ろうとするこのときの石丸には、彼女への特別な思いを読み取ることができるだろう。

しかし、雪江の場合はどうだろうか。彼女は石丸が近寄ってくるのを赤面して避けてこそいるが、石丸にほとんど関心を寄せていなかったと考えられるこれまでの雪江を補助線として引けば、その回避の原因として恋愛感情から派生する羞恥や気まずさを想定するのはいささか早計ではないだろうか。というのも、薫は、二人が昨晩の大円城寺に帰る道すがら、二人に何か特別なことがあったかのように想像しているが、そのとき、雪江は石丸に対して好意を示すような発言をそもそもしていない。それどころか、雪江は石丸の話を「聞いて居るのか居らぬのか、俯向きながら」(十)聞き、「口頭でばかり」(十)、「如何にも気の無さ相な返辞」(十)をしていたのである。それは、石丸に出会う前に、夫常雄の自身を避ける行動に雪江が傷心していたからであった。夜道の会話の後半で、雪江は親の決めた婚約者について石丸がどのように考えているのかという質問をするが、それも、雪江の意図としては、「一体男の方ツて者は、皆な然うした物でせうか……?」(十)とあるように、自身が夫から愛されていないのではないかとの疑心から、他の男も妻という存在を愛さないものなのかを石丸という男を例に問うてみたかったからに過ぎないと考えられる。つまり、これらを総合的に考えると、夫の自身を避ける態度に打ちのめされていた雪江にとって、石丸は特別な感情をよせるに至る人物ではなかったといえるだろう。よって、薫が「二人の挙動を注意して居た」のは、雪江の石丸への特別な思いを読み取る客観的根拠とは必ずし

もなり得ない。

　であるならば、雪江が石丸を避けるのはなぜか。そこで次の引用を見たい。夜道を大円城寺家に帰る雪江が人の気配を感じて、次のように思う箇所である。

　成程桑畑を隔てゝ背後の方から人の声が近付いて来る。定めし村の者で有らうが、秘に自分の家へ帰つても泊ることはならず、此様な夜中に再本家へ帰る此の様を見たなら、明日は定めし厭な噂を立てることであらう、出来るものなら顔は見せ度く無い、と思つたが、生憎と月は昼の様に明るいのだ。(十)

雪江はここで「秘に自分の家へ帰つても泊ることはならず、此様な夜中に再本家へ帰」らねばならない不様な自身の姿を人に目撃されることを嫌悪している。雪江は近寄って来るのが村人だと思っているが、それが石丸であったところで、みっともないところを見られたくないという気持ちが減少することはないだろう。つまり、彼女が石丸をこの翌日に避けるのは、このようなみっともないところを見られたことからくる羞恥のためであったと考えられる。

　では、なぜ薫も雪江が石丸に特別な感情を有しているかのように考えていたのかという問いが浮かぶが、それに関しても竹代の場合と同様のことが言えるだろう。薫も石丸と雪江の関係を疑っていたが、雪江が石丸を避けるからといって、そこに男女間の関係性を見出す客観的必然性はなかったはずである。にもかかわらず、彼女がそこに特別な関係性を推測してしまったのは、彼女も竹代同様に雪江を「淫乱な血統」を持つ者として認識していたからと考えられる。

　以上見てきたように、雪江に石丸への好意を読み取ったのは竹代の思い込みであって、彼女の譫言は客観的真実とは言い難く、雪江の言葉に従えば「邪推」でしかなかったと言えるのではないだろうか。また、薫の懸念も取り越し苦労に過ぎなかった。彼女らの心配とは裏腹に、雪江にはそもそも石丸に目を向ける余裕などなく、夫常雄とのことが常に彼女の頭を占めていた。ただ、先ほど竹代の譫言を検証した箇所では、石丸と初めて出会う場面において雪江が「美男子」とは発言していないことを確認したわけだが、可能性としては、作中に明記されていない箇所でそのようなことを口にしていたという想定ができるかもしれない。しかし、仮にそうだとしても、これまで確認してきた雪江を思い出せば、そこに深い意味があったとは考えにくいだろう。だからこそ、東京に帰るはずの石丸がまた高根沢に来たということを聞いたときも「雪江は只だ「然う?」と云つたばかり、ろくに取合もしなかツた。今は常雄の外の事は目にも耳にも入らぬ」(十一)のであった。たとえ雪江が石丸のことを「美男子」などと発言していたとしても、十一章の段階で「今は常雄の外の事は目にも耳にも入らぬ」ような状態である人物に、夫以外の男性への恋慕を想定する方が無理と言わざるを得ないだろう。

よって、姦通を犯す日はともかく、それ以前は、雪江は石丸に特別な思いを抱いていたわけではなかったと見るべきではないだろうか(9)。

五　姦通の誘因

さて、これまで、夫を持ちながらも他の男に気を持つような不埒な女ではなく、一途に夫を思う雪江を確認した。しかし、常雄と「内外の者に余り睦し過ぎるとまで笑はれた間」であった雪江は、作品結末において石丸と姦通を犯してしまう。そして、村では雪江を揶揄する「温室で蒸されて下紐切れて狂ふ仇花親の種」（十三）という「はやり唄」が唄われる。この歌から、結局は雪江が「淫乱な血統」を持つ者であったと村人に認識されたことが確認できる。確かに、男妾を三人も囲っていた祖母、姦夫の種を宿して身投げした母、十六から男狂いを始めて「淫乱に淫乱遣つた」（一）姉、それらの血縁者という立場にある雪江が、実際に姦通を犯し、さらに約一か月弱の間、「殆ど毎日の様に医学士が招がるゝ」（十三）のであってみれば、彼女に「淫乱な血統」という遺伝的要素を見出すのは妥当のように思える。

しかし、彼女は本当に「淫乱な血統」を受け継ぐ者と断言できるのだろうか。そもそもなぜ雪江は夫を裏切るような行為に走ってしまったのだろうか。その誘因は同時代評や先行研究において議論されてきたが(10)、本論でも改めて考えてみたい。

まずは次の場面を見よう。竹代が発熱によって雪江と石丸の仲を疑うよからぬ譖言を発し、それに驚いた雪江がその譖言を夫常雄に聞かれてはならないと思って竹代を見舞おうとする彼を無理に引き止めるが、それによって却って彼の機嫌を損ねてしまった翌日、即ち姦通する日の場面である。

> 決して良人の機嫌を害ねた事を悲んで居ぬでも無ければ、妹の病気を心配せぬでも無い……、無いどころか、心の中は此の二つで沸騰返つて、胸も裂けるばかりである、が、只だ暫時忘れて居たいのだ……、忘れ様としても忘れ居らる可き事でないから、せめては知らぬ風をして居たい、外の事に紛らして居たい、外の事で此の沸騰返る心の底に蓋がして置きたい、而して、暫時なりとも身体を息めたいのである。（十三）

この引用から、夫常雄と関係修復ができない悲痛と、妹竹代に対する心配による心労が雪江を疲弊せしめ、無気力にしたことが確認できる。妹思いの彼女であったらば、竹代の体調に対する憂慮は小さくなかったと想像される。また常雄に関しては、別の箇所で「漸く直りかけた機嫌を又損じたかと思へば、余りの悲さに口も利き得ぬ」（十二）とあり、機嫌が直りかけているという期待があっただけに、彼女の徒労の感は大きかっただろう。それらが大きい程、雪江の脱力も大きかった。この不遇や精神疲労からくる虚脱感、全てを忘れて

いたいとの思いが、姦通の土壌となったと見てよいだろう。

他の点に目を配れば、葡萄酒の酔いや、植物温室の特殊な室内環境の影響もあると考えられる。「雪江は酒を飲んだ上に此室（注・植物温室）へ入ったので、身体中の血が急に駆廻る様に感じた」（十三）とあることから、雪江は興奮状態にあったと見てよい。

また、石丸が積極的に迫ってきたことにも注目せねばならない。以下に竹代の譫言を聞いてきたと石丸が雪江に告白した直後の場面を引用する。

雪江は消えも入り度き風情で、俯向いて小さくなツて居たが、最う耐りかねて、畑の方へ逃出さうとした。

「ま、待つて下さい。」と達は慌てゝ其袂を捉へたが、見る見る顔は真蒼になツて、唇は紫に変つた。而して震声で、「決して御無礼な事は致しません、何卒鳥渡待つて下さい。」

雪江は何とも云はぬが、捉られた袂を払ひはしない。

「雪江様、私も、疾から貴女を懐つて居ます……。貴女の御身分は熟く知つて居ます、立派なお匹偶の有る事も知つて居ます。其れは熟く知つてますが……、矢張り、貴女を懐つて居ります……。」

「何卒、お離しなすツて。」と雪江は聴取れるか聴取れぬ低声で云ふ。（十三）

竹代の譫言を聞いたと石丸が打ち明けたとき、雪江は逃げようとした。それを引き留めたのは石丸であった。掴まれた袂を雪江も払いはしなかったが、その後も逃げ腰の雪江に対して石丸が積極的に思いを告白しており、姦通が行われた植物温室から石丸を「雪江は瞬きもせずに眺めて居た」といえども、そこまで彼女を追って入ってきたのも彼であった。二人の姦通は、石丸の告白と接近なくして成立しなかったはずである。このように、精神疲労やその場の環境作用、また相手からの積極的な働きかけが相俟って、それまでは特別な感情を抱いていなかったと考えられるはずの男性と雪江は姦通を犯してしまったと推認できる。

さらに、遠因としては熱に浮かされたことによる竹代の譫言を忘れてはならない。竹代の譫言は雪江が石丸に懸想していることを示すものであった。雪江のみならず、石丸もこの譫言を聞いた。であるならば、この譫言が石丸を雪江への告白へと促す契機となったと考えられる。その意味で竹代の譫言が姦通の遠因と言わねばならない。

また、もう一つの遠因として、常雄の浮気を挙げておきたい。先に、夫常雄と関係修復ができない雪江の悲痛を確認したが、そもそもその関係がこじれたのは常雄が妾を囲ったからであった。もちろん、一連の騒動における常雄に対する雪江の行動にも問題がないとは言い切れないが、当然のことながら、それも常雄の不貞がなければあり得なかったはずである。また、雪江は「兄様はね、新橋だの柳橋だの、始終芸妓

買なんぞ許してる人だけれど、彼の人（注・常雄のこと）はもう、実に堅いんですよ、ですから学友間で、温和いと来てはもう有名な物ですもの」（二）と述べていたように、夫常雄の貞操は良いものと思っていた。であるならば、それだけに、夫に妾がいると知った時の心痛は小さくなかったと想像される。よって、常雄の不貞が雪江の姦通騒動の根源とも考えられるだろう。

六　「淫乱な血統」は遺伝しているのか

見てきたように、「淫乱な血統」なるものがこの世にあると仮定しても、雪江の姦通の直接原因は彼女の境遇、精神疲労、環境の作用、他者からの影響などであって、遺伝的要素が第一に働いたためかどうかは疑問である。

とはいうものの、彼女に遺伝がないと完全には言い切れない。前述のような誘因があったとしても姦通を絶対に避け得ないわけではなく、普段から好意を持っていなかったと考えられる異性と突発的に不義を犯してしまうところに、却って「淫乱な血統」を見ることも無理ではないだろう。また、鏡に映った自身の美貌に微笑む姿や、竹代の病気が完治する一か月弱の間、石丸との関係がそれほど長く続いたかもしれないこと、そしてあれ程一途に接してきた夫と、姦通後、結局別れてしまうことなどを勘案すると、そこにはどこか精神に異常を来した雪江の姿が想像でき、そこにおぞましい血筋が感じられなくもない。また、ここまで見てきたのはあくまで姦通の誘因であって、彼女の「淫乱な血統」という遺伝的性質がその後発露したとも考えられるだろう。さらに言えば、先に見たように、いくら石丸への好意が表面的には見えないといえども、それが必ずしも遺伝が無いことを証明するとは限らないだろう。

しかし、それでも雪江が「淫乱な血統」に囚われた人物であったかどうか結論を下すには慎重でなければならない。確かに彼女は姦通を犯した。しかし、彼女は「淫乱な血統」を受け継いできたとされるこれまでの円城寺家の女たちと同じ系譜に並べられるべき女なのであろうか。ここで、雪江の祖母、母、姉についての村人たちの噂を改めて確認しよう。噂話であるため、その内容に若干の誇張があるとは考えられるが、雪江の祖母は男妾を三人も囲い「男狂も男狂ひ、始末に能ねえ」（一）「宛然女の狒々」（一）と揶揄された女であった。また、雪江の母は知的障害があるかと思われる男と交わり、「余程な茶人」（一）と噂される母であった。そして雪江の姉は夫を持ちながらも、「美い男見るだと、諸味食つた泥鰌の様に」（一）なる姉であり、十六から色狂いをはじめ、二十二で死ぬまで何十人という男と関係した姉であった。このような円城寺家の歴代の女たちに比べて、雪江はどうだろうか。三年間一途に夫に接し、「奇麗なお方」と言われる石丸を見ても淫らに気を移さず、姦通を犯してしまったといえ

ども、それも根本は夫の不貞にはじまり、さまざまな外的誘因によって一人の男と結果的に姦通を犯してしまったのが雪江であった。このような雪江を確認したならば、彼女は不貞な行為を働いたという点では血縁者たちと同類であっても、質的には異質であると言えるのではないだろうか。[11]であるならば、彼女が本当に遺伝を受け継ぐ者であったのか、再考の余地があるだろう。よって、姦通という不貞な行為を行っている以上、雪江が「淫乱な血統」を持つ人物ではないと断言はできないが、しかし同時に、雪江がこれまでの円城寺家の女たちとは異質であることを勘案すると、彼女が遺伝を持つ者であるとも一概には言い切れないのである。

七　偏見への桎梏・雪江の孤独

しかし、本論で注目したいのは、雪江が「淫乱な血統」を受け継ぐ者であったか否かという決着を下せない事柄ではなく、先にも見たように、一概には断定できないにもかかわらず、雪江は、高根沢の村人に「淫乱な血統」を受け継ぐ者として認識され、揶揄されてしまっているということである。もちろん、それがまったくの間違いとは言い切れない。しかし、一概に雪江が「淫乱な血統」をその血に宿す者と断定できない限り、その村人の認識が安直に過ぎ、偏ったものであることもまた間違いない[12]。

ただ、仮に、村人が雪江の姦通に至るまでの事情を窺い知ることができなかったのであれば、そのような安直な偏見を持ってしまったとしても、仕方のないことと言えるだろう。しかし、ここで雪江の姦通の根源となった夫常雄の妾を囲うという不品行が、新聞でとりあげられていたことを思い出したい。新聞でとりあげられたのであるから、村人もこの事実を知っていたと考えてよいだろう。であるならば、村人は常雄の不品行が雪江を精神的に傷つけ、それによって雪江が淪落してしまったと理解できないわけではなかったはずである。そもそも、雪江が常雄と「内外の者に余り睦し過ぎるとまで笑はれた間」の人物であったことは村人に周知の事実であったはずであり、それよって、村人の中には雪江が「淫乱な血統」を断ち切り、これからは円城寺家を「婦人の鑑」になるような血筋に変えてしまうという認識を持つ者までいたのである。にもかかわらず、それらのことを顧みずに姦通という行為の表面上の醜聞によって、遺伝という噂に雪江の存在を回収してしまったところに、その安直さがより透けて見えるのである。

とはいえ、このような冷静な理解が村人たちの集団心理として可能であったかということを考えれば、木戸雄一氏が「結末で、主人公雪江の姦通が〈淫乱な血統〉の結果として、村人達の間で〈はやり唄〉にされてしまうということからもわかるように、〈淫乱な血統〉という認識は村人達の中に潜在化しており、円城寺家の人々の行動を規定する記憶となって

いる」[13]と述べているように、それは村人たちの責任というよりも、噂が村人を盲目にしてしまうだけの強力なものであったともいえよう。しかし、村人が安直であったにせよ、噂の影響力が強大であったにせよ、結局は雪江が「淫乱な血統」を持つ者として揶揄されてしまったという事実に変わりはない。

予め述べたように、先に論じた誘因については既に同時代評や先行研究でも論及されてきた。その上で、遺伝的要素を描写しようとしながらも、その他の誘因が目立ってしまうことに、作者天外の失敗を見る見方があった。片岡良一氏は「さうして辻褄が合されて居れば居る程、その条件や道具立(注・本論でいうところの遺伝以外の誘因)の上に結果した破局と、特殊な血の問題との関連は希薄になつて来る」[14]と述べている。また、木戸氏は、本作に対する同時代読者の言説として、雪江の姦通を「淫乱な血統」によるものとして解釈するものと、雪江の「自由意志」によるものとして解釈するものの相反する二つの解釈があることを提示して、それは本作においてそのどちらとも理解できるような語り方がなされていることに起因することを明らかにし、このような相反する二つの解釈を前提とした「極めて貧しい均衡」の上に成立する姦通事件を抱え込む本作が「果してどれほどの多様性を許容できるのであろうか。読者はその二つの選択肢を前提とする枠組みに取り込まれ、その貧しさを共有することになる」[15]と述べている。しかし、作品内の出来事として見逃してはならないのは、血の問題とは関わらないいくつかの要素が見受けられるにもかかわらず、村人の理解、即ち「はやり唄」は、雪江の姦通の原因として、専ら血の要素を見出しているという事実である。

つまり、雪江が「淫乱な血統」を受け継いでいるかは明確に判断できないにもかかわらず、高根沢の村人たちにはそれが理解されず、安易に雪江がその血を宿す者として解釈されてしまったという実体と認識の齟齬に、彼女の不幸があるのではないかと考えるのである。高根沢の村人の認識は必ずしも正確とは言えず、その意味で彼らのそれは、一方的な決めつけであり、所詮、偏見と言わざるを得ない。しかしその偏見が「はやり唄」となり、村に広まるのであれば、それは村人による雪江に対する「淫乱な血統」を持つ者という偏見への桎梏である。また、それは彼女が一人の独立した個人として認識されることなく、血のつながりの中に村人たちによって埋没させられてしまうことも同時に意味している。本論の冒頭でも述べたように、本作はゾライズムの手法の上に成立したものとして捉えられてきたが、本作の「はやり唄」という題名は、「淫乱な血統」が発露した女以上に、それを囲繞する人間の言説への注目を促しているのである。さらに、本作における高根沢という村が、「畑に働いてる下男共と、茶摘女等との間に交へられる露骨の情事談の喝采」(七)が起

こり、夜道を二人で歩くと「村の者だと、惚れだの惚られだのツて、直き姦通騒動でもおツ初める」（十）とされる住人たちが住む村であることを思い出せば、村の共同体における雪江への揶揄は、慣用句でいうところの目くそが鼻くそを笑うという理不尽なものとしても見えてくるのである。

雪江の不幸は、事態が姦通にまで至ってしまったことであると考えられるが、仮にそこに至るまでの事情を正確に認識する者が存在したとすれば、彼女は非難されこそすれ、遺伝一辺倒の枠組みのみに囚われず、もっと惻隠の情をもって理解される余地があったのではないか[16]という疑問を立てるとき、個の埋没と偏見への桎梏こそが彼女の真の不幸として見えてくるのではないだろうか。

そしてこの齟齬は、さらに次のことを物語っている。即ち、雪江は、彼女自身を見詰め、正しく理解し、同情を寄せてくれる者を持たない孤独な女であったということである。本作は全十三章から成るが、その内、第三章から第十二章までは雪江と常雄の夫婦喧嘩と、それに伴う雪江の心理変化を軸として展開している。にもかかわらず、第十三章の最終章で、雪江という存在は高根沢という共同体において急転直下に「淫乱な血統」を遺伝した者へと回収されているのである。遺伝のみでは回収し切れないはずの第三章から第十二章に亘る雪江の存在が全く顧みられていないことは、彼女の孤独の深さを物語っている。

さらにここで看過してはならないのは、この雪江を理解しない者とは、村人のみを指すのではなく、親族の竹代や薫をも含まれるということである。既に、竹代や薫が雪江を「淫乱な血統」を受け継ぐものとして認識していたことに関しては論じた。このことは、村人のみではなく、雪江の身内である竹代たちも、雪江イコール「淫乱なる血統」が遺伝した者という認識を持ち、彼女を偏見へと桎梏する者たちであったことを指示している。もちろん、竹代たちと、「淫乱な血統」を揶揄し、好奇の目で雪江を見ていた村人たちでは、雪江に対する接し方が相違している。しかし、畢竟するに、雪江に対する同一の見方を持っていたことに変わりはない。

そして、その認識は、彼らの雪江という人物に対する理解の浅はかさを意味し、同時に、自身を理解してくれる者の不在、即ち雪江の孤独を一層強めている。特に、雪江は竹代を大切に思っていただけに、その孤独は一層深いと言えるだろう。雪江は竹代の譫言に驚き、「竹代様は……、私も子供の時から熟く知つてるが、仮にも此様な、厭らしい事なんぞ云ふ人ぢや無いんだが……、思つてる人でも無いんだが……、それとも矢張り……、私ばかり知らないんで……。」（十二）と、自身の知らなかった妹の存在に「深く嘆息」（十二）している。ここは、あくまで竹代が譫言を言ったという表面上のことに驚いているに過ぎないが、その譫言が雪江に対する村人同様の認識故のものであるならば、その「嘆息」とそこ

から感じられる孤独の感はより深いと言わざるを得ない。

このように、『はやり唄』は、「淫乱な血統」なる遺伝的要素が発露してしまった女の物語というよりも、個が埋没され、偏見へと桎梏されてしまう孤独に見舞われた女の物語であった。

おわりに

本論は、小杉天外作『はやり唄』を取り上げ、精読することを試みた。そこで、改めて雪江が遺伝要素を保有するものであったかどうかの解釈の決定不可能性を考察したわけだが、そのこと以上に、本論の注目点は、雪江が「淫乱な血統」を持つ人物とは必ずしも断定できないにもかかわらず、村という共同体ではそのことが理解されず、安直に雪江が「淫乱な血統」という巷説に回収されてしまっていることに注目した。そして、そこに偏見へと桎梏され、孤独に見舞われる女の物語を読解した。姦通した者がこうして社会から揶揄され破滅へと追いやられていくのは、姦通小説の一形式であると考えられるわけだが、この問題については別の機会に論じたい。

注

（1）桂月、烏山、天渓、秋江、花袋「はやり唄」合評（「太平洋」一九〇二・一・一二）など。

（2）片岡良一『近代日本の作家と作品』（岩波書店　一九三九・一一）や木戸雄一「小杉天外の「写実小説」と読者」（「稿本近代文学」第二一集　一九九六・一一）など。

（3）片岡良一（（2）に同じ）や、その他にも、吉田精一『自然主義文学の研究　上巻』（東京堂出版　一九五五・一一）、瀬沼茂樹『近代日本文学のなりたち』（弘文堂書店　一九七一・四）など。また、徳田秋声が「小杉天外氏」（「中央公論」一九〇八・七）において、「例へば氏がゾラの作物を読んで、あすこが巧いとか、此処が巧妙だとか言はれるのを詮議してみるとそれは多くはゾラの技巧上の優れた部分々々を指して言はれるやうで、ゾラ自身の写実其物の全体、芸術に対する立場と云ふやうなものを、広く深く味はれぬやうな気味がないでもない。氏のは何処までも形式から入つた写実主義と云ふとも出来やう」と述べている。

（4）（1）に同じ

（5）孤島「『はやり唄』の評の評」（「読売新聞」一九〇二・三・二三）

（6）安田義明「小杉天外『はやり唄』考―近代物語文学の視点から―」（「芸術至上主義文芸」第一二巻　一九八六・一一）

（7）安田義明（（6）に同じ）氏は、「雪江が問いつめても妾小福の存在を告げようとしなかったのは、雪江の言う「心配性」つまり、雪江の行動に対する不安といったことにはとどまらな

い。竹代をとらえたであろう不吉な予感は、自分たち姉妹の中に流れる円城寺の「家の血」に対するおびえでもあったのではないか。更に、竹代の石丸への淡い恋心が、雪江と石丸の行く末への予感を増幅させている」と指摘している。

（8）（7）を参照

（9）石丸に対する雪江の好意に関しては、畑実氏が「小杉天外『はやり唄』（「解釈と鑑賞」第三七巻一〇号、一九七二・八）において、「第一にどのようにして石丸と雪江が親しくなっていくのか、その内面的な動きなど全くと言っていいくらい描き出されていない。だから最初に会ったときから雪江が石丸に心ひかれていたのだというような説明を病気になった妹の竹代の譫言で言わせてすますというようなことをしている。これでは遺伝と環境ということがいくら説明されても意味がなかろう」と述べている。同時代における評もこのような点を批判するものが見受けられる。しかし、本論では、雪江に石丸への好意がなかったと捉える可能性を示すと同時に、注目したいのは、それにもかかわらず、竹代たちが雪江と石丸の関係を危惧しているということである。このことが意味するところのものについては、後の「偏見への桎梏・雪江の孤独」にて詳述。

（10）孤島（（5）に同じ）は、同時代評における「雪江の堕落の経路」を考察したものとして、「遺伝」、「気候」、「境遇」、「必理上乃至生理上の条件」などがあることを記している。

（11）孤島（（5）に同じ）は「去れど雪江には「十六から男狂ひ打初めた」といふ姉の片影をだも存せざるのみならず、「今日の仏の妹といふ事は、片時も忘れぬ」心得あり。此の篇に表はれし所にては、雪江は我儘な、情に脆き、女らしき女にして、更に普通の女性と異なる所を見ず」と指摘している。

（12）片岡良一（（2）に同じ）氏は、「云はゞ極めて自然に陥つた女の過失を、さういふ意味での過失と観る代りに、飛躍的な血の問題と結びつく程の異常事と観てゐるところに、あの時代なり作者なりの女性観からの或る間接的な投影があるのかと思われる」と述べ、雪江の姦通に対して「はじめから血の問題などを用意してかゝってゐたのは、作者に於ける主観的な飛躍」と天外を批判している。「主観的な飛躍」を以てして作者を批判するのは容易であるが、読解においては、それを手掛かりとして捉える検討がなされてもよいだろう。

（13）（2）に同じ

（14）（2）に同じ

（15）（2）に同じ

（16）芝峰は「天外のはやり唄」（「帝国文学」一九〇二・二）において、「殊に人物の描写常に客観的に流れ、終に同情なき叙述に陥りたる傾あり、此の作の主人公雪江の如きは、写し方一つによりて、読者の同情を惹き得るに拘らず、淫乱一偏の女となして顧ざるは、甚だ惜むべし」と述べている。これは作者の問題のみならず、作品内においては雪江を取り囲む人間の問題でもある。

※『はやり唄』の本文の引用は、『明治文学全集』第六五巻（筑摩書房、一九六八年一〇月）に拠った。漢字は適宜通用のものに改め、ルビは省略した。

（むらおか・しょう／本学大学院博士前期課程）